

梅園三語 玄語

例

旨

安永四年本準拠

玄語

日本 鎮西 三浦晉 安貞 著

例旨

○蔽は必ず明に由る。塞は必ず通に由る。一一の態。然らざるを得ず。

蓋し夫れ人の生爲る。必ず習する所に染む。

習する所に染まれば。則ち其の素なる所を失す。是を以て。

俗習の蔽は。學之が砭鍼を爲す。

學習の蔽は。殆ど藥石を擲つ。

之を染むるや易し。之を素にするや難し。

之を蔽うや易し。之を復するや難し。夫れ

因循薰蒸の久しき。猶お臭人の其の臭の臭とせず。

屠人の其の壇を壇とせざるがごとし。

髪を數え毛を簡ぶ。説の精微ならざるに非ず。

天を超え地を越ゆ。教の廣大ならざるに非ず。惟だ

各其の得て有する所を徳とし。

其の由て行なう所を道とす。

珠を拾いて玉を遺し珷玞を惡んで瓊瑤を棄つ。

異同紛縕。一護一許。各おの其の門に據り。各おの其の戸を守る。

區域を相い畫し。是非互いに殊なり。是に於てか。

*
一五三五七
一五三五八
一五三五九
一五三六〇
一五三六一
一五三六二
一五三六三
一五三六四
一五三六五
一五三六六
一五三六七
一五三六八
一五三六九
一五三七〇
一五三七一
一五三七二

一五三七三

或いは相い睨視し。或いは相い仇讐す。

一五三七四

學習の人の聰明を蔽い。人の才力を病ましむる所以なり。

一五三七五

善惡之を擇び。是非之を折る。

一五三七六

聖人に非ざる自りは。則ち得失無きこと能わず。

一五三七七

擇びて審かならず。將に紫を以て朱を亂さんとす。

一五三七八

惡みて學ばず。將に簪を以て相を忌まんとす。

一五三七九

學びて黨せず。思うて偏ならず。則を獲て履む。斯れ道なり。

一五三八〇

我れ其の及ぶ可からざるを知ると雖も。而も射の拙なるを以て鵠を廢せんや。

一五三八一

晉は垂髫より。触るる所總て疑わし。

一五三八二

解く者耳を昧しくすと雖も。語りて徵無し。竊に夢寐の語と爲す。

一五三八三

思うて偏なるなり。以て無權の衡と爲す。

一五三八四

故に人の言に曰く。火は易なり。故に熱す。水は喰なり。故に寒すと。

一五三八五

晉は則ち以爲らく。易なる者。奚爲れぞ熱す。喰なる者。奚爲れぞ寒すと。

一五三八六

人の言に曰く。易は軽くして升る。喰は重くして降ると。

一五三八七

人の思うや。此に至りて止む。晉の疑うや。是に於て已甚し。

一五三八八

隆然として鳥き者。何爲れぞ視るや。

一五三八九

遂乎として谷なる者。何爲れぞ聽くや。

一五三九〇

目は何爲れぞ聽かざるや。耳は何爲れぞ視ざるやと。

一五三九一

人は則ち是に至りて釋つ。晉は則ち釋つること能わず。

己の得て有する所を得て而して之を有せざる者をば。之を非とす。
己の由て行なう所に由て而して之を行わざる者をば。これおこな
ひとすなわここのいよだんすすむすなわまど
人は則ち是に於て能く斷ず。晉は則ち惑う。
晉は則ち未だ全信すること能わず。
人は諸を古に聞きて。諸を書に得て便ち言つ。
天地に於けるや。荒唐散漫として説く。
生死に於けるや。恍惚曖昧として言つ。
驗を僻に取り。舌を空に懸く。
人は則ち意に介せず。晉は則ち憚然たること能わず。
反復して之を思。沈潛して之を繹ぬ。
俯仰の間に小窺有るに似る。竟に自量せず。
此に斯の述有り。蓋し斯の述は。
一一の條理に由り。以て則を天地に取る。則ち
敢えて古と計校せず。造語は己に由ること有り。
一氣は。僕易なり。大物は。天地なり。
世に方圓と曰う。此に直圓と曰う。
世に日月と曰う。此に日影と曰う。
或いは其の名を命ずるや新たに。
或いは其の義を取るや殊なり。惟だ

一五四一

一五四二

一五四三

一五四四

一五四五

一五四六

一五四七

一五四八

一五四九

一五四一〇

一五四一二

一五四一三

一五四一四

一五四一五

一五四一六

一五四一七

一五四一八

一五四一九

一五四二〇

一五四二一

天地と合するを求めて。而して定説を顧みるに暇あらず。
 惟だ冀う人の習する所に病まず。以て向う所に活し。而して
 之を是非するに天地を以てし。之を取捨するに天地を以てすることを。
 其の門を護り。其の戸を守り。區域を画し。而して是非の塗を殊にし。
 以て他の賢哲を禦ぎ。而して此の赤子を外にせざらんことを。
 故に儻しこの語を讀まんと欲する者は。専ら舊見聞に証し。専ら古訓詁に據らば。
 則ち晉の罪を獲ること。亦た多からんとす。

○其の書は四冊。曰く本宗。曰く天冊。曰く地冊。曰く小冊なり。

本宗は一冊。他の三冊は。兩兩を分つ。

本宗の一冊は。鬱渟の神。混沌の物を語る。舉て之を斯の中に有す。
 然り而して物の若く立する所は。則ち物の若く立するを以てなり。
 神の若く活する所は。則ち神の若く活するを以てなり。
 立する者は物を露す。活する者は物を没す。

没は天を爲す。露は地を爲す。

天冊は則ち其れ鬱渟。故に鬱渟として活する者。舉げて此に繫かる。
 地冊は則ち其れ混沌。故に混沌として立する者。舉げて此に繫かる。
 條理は粲然として相い判ると雖も。而れども

没を説きて露に入り。露を説きて没に入る者は。
 混成して罅縫を没すればなり。含めば則ち開く。開けば則ち含む。故に

一五四三〇 梅鬱淳の神。混沌の物。已に一に開く。

一五四三一一
神は天地を開きて。会易は綱縄す。故

一五四三二一
大は廻ざまち能く小を容れ。小は廻ざまち能く大に居る。
すよつ よ きゅう すよつ よ

* 一五四三三
大は廻ち能く給し。小は廻ち能く資る。
ゆえ しよう だい み すなはい ものね

* 一五三四
故に小より大を觀れば。則ち容るる者居る者。各自に勢を張る。

故に小より佗を觀れば。則ち佗は則ち大なり。

大は能く小を統べ。小は能く大を散す。

一五四三七
一五四三七
大なる者は窮む可からず。小は盡す
そ
し
れ
じ
ん
ふ
う
も
の
は
。
ば
ん
ぶ
つ
ち
ゅ
う
い
ち
ぶ
つ
り
。

夫れ人なる者は、萬物中の一物なり
（しんぶるものよ。しゆうしんちゅういちしんふるよ。）

一五四三四〇
一五四三九九
我遂に心なる者ひ
こそ其のきょうをひらけば。
則ちうつぼ字日比谷圓○
皆よ我が鏡一ムキゆうす。
故ア

我知り其の境に聞いに見て櫻花満開
人を以て小流べ。我を擧げて它を召めく。

是れ之を我が小冊と爲す。是に於てか。

一五四四四
大は給せざる所無く。小は資らざる所無し。故に

一五四四五
小冊は。
活する者を以て。
人部と爲す。

一五四四六
立する者を以て。物部と爲す。

*一五四四七 物部なる者は。大小を分別する者。便ち我が地冊なり。

*一五四四八
人部なる者は。
天人を分別する者。
便ち我が天冊なり。

*一五四四九

一五四五〇

一五四五一

一五四五二

一五四五三

一五四五四

一五四五五

一五四五六

一五四五七

一五四五八

一五四五九

一五四六〇

一五四六一

一五四六二

一五四六三

一五四六四

一五四六五

一五四六六

天地は則ち一宇宙なり。宙の緯塞を説けば、則ち言に先後有り、故に
天冊は部を活立に分つ。
天冊は其の一は迺ち活部、天と神となり、
天冊は其の一は迺ち立部、神と本となり、
天冊は其の一は迺ち没部、通塞を説く。
天冊は其の一は迺ち露部、覆載を説く。
小冊。露を物にし没を人にするは。大を分ち天を分つを以てなり。故に
將に斯の語を讀まんと欲する者は。
流れに泝ると。流れに沿うと。
左よりすると。右よりすると。
中より提ると。端より起ると。
猶お環の手の触るる所に從いて起きて轉ずるが如し。
これを次序するが若きは。則ち本宗に統有り。
鬱渟は能く活す。
混沌は能く物す。
人は小境を開きて。亦た天と勢を張る。蓋し
人は如し天地に達觀せんと欲せば。但だ

天に觀て。而して之を人に獲んことを要す。

人に觀て。而して之を人に獲んことを要す。

一五六六八
一五四六九

*一五四七〇
*一五四七一

*一五四七二—一七三

一五四七四

一五四七五

一五四七六—一七七

一五四七八

一五四七九

一五四八〇

一五四八一

一五四八二

一五四八三

一五四八四

一五四八五

一五四八六

一五四八七

一五四八八

往く所皆な然り。斯の語を讀む者。

文は變化に錯綜す、
氣は混粲を有す、
物は經緯を有す、
緯は兩辭齋發す可からず、
緯は條理に由て分つ可し、
混は罅縫綻開す可からず、
晉は焉ぞ敢て與らん。

○物は經緯を有す、
氣は混粲を有す、
諸を圖畫に託するに、
粲は條理に由て分つ可し、
混は罅縫綻開す可からず、
晉は焉ぞ敢て與らん。

一五四八九

一五四九〇

一五四九一

一五四九二

一五四九三

一五四九四

一五四九五

一五四九六

一五四九七

一五四九八

一五四九九

一五四九〇

一五四九一

一五四九〇

一五四九一

一五四九二

一五四九三

一五四九四

一五四九五

一五四九六

一五四九七

天をいへば則ち之を徒らに天にし。

地を言へば則ち之を徒らに地にし。

指すに從いて之を徒らにするは。能く玄を讀む者に非ざるなり。

是を以て。圓を玩んで直を遺し。表を觀て裏を忘るるは。

能く圓を玩ぶ者に非ざるなり。讀みて一聲を得れば。

須く性物を剖對して。一天地の此に成るを觀るべし。

重ねて一聲を得るに及んでも。亦た須く性物を剖對し。

一天地を此に成し。以て其の粲を得。以て其の混を得る。

故に一事一際。一物一境。己れ其の境に入りて。而して

天地を其の境に盡くす。

是を以て。甲を擧げれば。乙丙丁。皆な來りて甲に繫かる。

乙を擧げれば。甲丙丁。皆な來りて乙に繫かる。

丙丁自り。戊巳壬癸。往く所皆然り。是の故に。

機に居るや。則ち天地は皆な機なり。

體に居るや。則ち天地は皆な體なり。

此の如くにして而して後 精龜相い得て。統散偏全。相い融す。

一事一際。萬物萬境。

言語を以て之を盡くさんと欲せば。則ち

啻に蟲を以て海を測るのみならず。且つ

一五五〇八
一五五〇九

言に統散有り。反比有り。

先後の序す可き有り。次序を用いざる有り。

一五五一〇
一五五一一

専ら其の主を指す有り。一を擧げて萬を例する有り。

一五五一二
一五五一三

専ら其の主を指すは何ぞ、體を以て物を露すれば、則ち截然として其の物を殊にす、故に

一五五一四
一五五一五

其の天を説き地を説き水を説き火を説くが如きは、専ら其の主を執る。

一五五一六
一五五一七

一を擧げて萬を例するとは何ぞ、性を以て氣を見す者は混然として萬物を融す。

一五五一八
一五五一九

其の徳と曰い道と曰い性と曰い才と曰うが如きは、言語の道。譬諭有り。譬諭とは、彼を假りて此を曉すの術なり。

*一五五一一
一五五一二

一を擧げて萬を例するとは。假るに非ざれば則ち比喩に非ず。

一五五一三
一五五一四

故に其の言に曰く。之を某に言うにと。又た曰く。之を某に移すにと。

一五五一五
一五五一六

故に露を説く者は。多くは専ら其の主を指す。

一五五一七
一五五一八

没を説く者は。多くは一を擧げて佗を例す。蓋し

一五五一九
一五五一九

混成粲立。天地の態然り。是に於て。

一五五一九
一五五一九

其の言は。上統べて下剖く者有り。

一五五一九
一五五一九

偶を待たずして直ちに下なる者有り。

一五五一九
一五五一九

章を隔てて相い對する者有り。

一五五一九
一五五一九

辭は對して意の汎なる者有り。

一五五一九
一五五一九

主は對して辭の汎なる者有り。

一五五三〇—三一

(追記につき削除。)

一五五三一
對に反有り。比有り。互有り。汎有り。

一五五三三
彼此相い證する者有り。審かにせざれば則ち將に失せんと。
是れ斯の語の文法なり。圖に。直圓有り。大小有り。

一五五三四

一五五三五

大圓は混成に擬す

一五五三六

小直は槩立に擬す

一五五三七

大直は剖析を爲す

一五五三八

小圓は對待を列す

一五五三九

文に反合有り、圖に表裏有り

一五五四〇

文に剖對有り、圖に雙岐有り

一五五四一

是れ圖の大意。書に合する有る者なり。

一五五四二

噫夫れ。華を畫いて妙麗を極むるも。而も復た子を含まず。

一五五四三

鳥を刻んで彷彿を致すも。豈に其の眞眞を爲さんや。是に於て。

一五五四四

天巧は人に假さず、

一五五四五

人巧は天に肖す、

一五五四六

獲る所は則ち魚兔、設くる所は則ち筌蹄なり。

一五五四七
○塊塊たり。洋洋たり。往くとして氣に匪ざる靡く。

往くとして物に匪ざる靡きなり。

一五五四八

物は見る可し。而して氣は則ち漠然たり。漠然として見難し。故に

一五五四九

(PA 021)

(PA 022)

一五五五〇

其の粲然も亦た之を知り易からず。氣に精麗有り。

*一五五五一

龜を察して以て精に漸む。行く者の始めて塗に上る所なり。蓋し

一五五五一—五三

人は塊洋網縕の間に坐して。之を視て見えず。之を聽いて聞こえず。

*一五五五四—五五

之に触れ礙げざる者を觀て。或いは以て空と爲し。或いは以て無と爲す。

一五五五六—五七

夫れ未だ條理を知らざれば。觀て空無と爲す。亦た宜ならずや。蓋し

一五五五八—五九

会易の態。物を反して居を同す。故に充と空と成り。無と有と成す。故に

一五五六〇

其の所謂空なる者は、體に空にして、而して氣に空ならず、

一五五六一

其の所謂無なる者は、質に無にして、而して氣に無ならず、

一五五六二

試みに水注を製するを觀よ。必ず一孔を穿つ。

一五五六三

一孔は氣を通じて、一孔は水を通ず。

一五五六四

一勺の水出づれば、一勺の氣を納る。

一五五六五

水盡きれば則ち氣充つ、氣出でざれば則ち水入らず。故に

一五五六六

地ならざる者は。皆な天なり。

一五五六七

質ならざる者は。皆な氣なり。

一五五六八

已に質と相い拒みて。而して相い居らず。

一五五六九

水は門戸を以て出入りすれば。則ち氣も亦た門戸を以て出入りす。(これ以下 PA より欠落)

一五五六〇

既已に空無ならば。豈に門戸を以てするを爲さんや。

一五五六一

已に門戸に由ること有り。已に物と居を争う。

一五五六二

嚴然として充ちて且つ有る者に非ずや。

(I 379a)

(PA 023)

一五五七三

一五五七四

一五五七五

一五五七六

一五五七七

一五五七八

一五五七九

一五五八〇

一五五八一

一五五八二

一五五八三

一五五八四

一五五八五

一五五八六

一五五八七

一五五八八

一五五八九

一五五九〇

一五五九一

充ちて有ると雖も。而も闐として聲臭無し。是れ廻ち氣の謂なり。

而して物と我と。亦た斯の中に遊ぶ。而して

鳥獸の居る所は。魚鼈居らず。

彼れ此れに來れば輒ち死す。此れ彼れに之けば輒ち死す。

此れを以て彼れを觀。彼れを以て此れを觀る。反して能く同す。

我は此の中になり。試みに繩一條を執りて之を垂るるに。

壓することも無く援かるることも無くして。而して直下正立す。

此の氣の直なるを觀る。試みに革囊の鞠を以て。

氣を内に充たして。外出の罅縫を塞げば。則ち

千鈞以て之を壓すと雖も。而も墊らず。

此の氣の持するを觀る。囊破るれば。則ち爆然として風を爲す。

以て風なる者は此の氣の動なるを知る。

風を隔つれば。則ち煦煦たるを覺ゆ。

以て温なる者の此の氣の靜なるを知る。

物は水に入らば則ち溼る。此に在らば則ち燥く。故に

名を命じて燥と曰う。其の水と相い拒むを觀る。則ち

氣と雖も體有り。體有る者は。處を得て居る。

今此れ質に空なりと雖も。而も空を以て體を成すなり。夫れ

已に其の處を得て居る。已に物と其の處を争えば。則ち

*一五五九二

一五五九三

一五五九四

一五五九五

一五五九六

一五五九七

一五五九八

一五五九九

一五六〇〇

一五六〇一

一五六〇二

一五六〇三

一五六〇四

一五六〇五

一五六〇六

一五六〇七

一五六〇八

一五六〇九

一五六〇一〇

一五六〇九

一五六〇一〇

一五六〇一〇

氣も亦た物なるのみ。物は氣に非ざる莫し。氣は物に非ざる莫し。是に於て。
氣は散を以て體を虛す。體無きに非ざるなり。

物は氣を以て實を結ぶ。氣ならざるに非ざるなり。

前の見る可きの體なる者は。體なり。

漠然たる者は。精體なり。

鹿を知りて精を知らず。詎んぞ物を知るに在らん。

其の未だ物を知らざる。詎んぞ氣を知るに在らん。

氣鹿なれば則ち體露す。

氣精なれば則ち體没す。

没して鬱渟の神を爲す者は、德性なり、

成りて混淪の體を露す者は、天地なり、

露する者は、會なり、

没する者は、易なり、

露する者は、會易先後無し。

没を擧ぐれば則ち露

没を擧ぐれば則ち没

讀む者。拈するに從いて必ず先後を序せざれ。且つ

露を擧ぐれば則ち露に入る、

露を説けば則ち没に入る、

諸を粲立混成の間に求めよ。

(「の」まで PA より欠落)

(I 379b)

一五六一

一五六二

一五六三

一五六四

一五六五

一五六六

一五六七

一五六八

一五六九

一五六一〇

一五六一二

一五六一三

一五六一四

一五六一五

一五六一六

一五六一七

一五六一八

一五六一九

一五六一七

一五六一六

一五六一七

一五六一八

一五六一九

○夫れ人は蜉蝣の年を以て。眇として天地に處して。視聽の廣からざるに病み。應接の徧からざるに苦しむ。

苟くも之を審察熟體するに弗ずんば。

則ち猶お破鏡の物の全形を照すこと能わず。

擊火の物の全體を察すること能わざるがごとし。蓋し

世は穎悟に乏しからざると雖も。而も

未だ能く天地の以て然る所を審かにすること能わず。

天地の偏半を見て。以て全體と爲す。

未だ能く天地の以て然る所を審かにすること能わず。

天地は。混圓たる其の形。虛實其の中に於て物す。

塊洋の綱縕を見て。以て空無と爲す。蓋し

天地は。混圓たる其の形。虛實其の中に於て物す。

今や世は。實測と推歩と漸く精しければ。則ち

其の形を知るに於る頗る熟す。其の形に頗る熟すと雖も。

未だ能く天地の以て然る所を審かにせざる者は。何ぞや。

会易の故に罔きを以てなり。

夫れ会易なる者は。對待の一いちなり。

人は其れ孰れか其の一斑を窺わざらん。未だ其の全體を見ざるなり。

已に其の一斑を窺いて。而も未だ其の全體を見ざる者は。何ぞや。

未だ條理の歸する所を得ざればなり。

已に條理の歸する所を得る。四肢百骸。其の統ぶる所を得る。而して

一五六三〇

其の分る所を知る。刀を奏むこと騒然として。肯綮自から分る。

一五六三一

族の爲し難きに至ると雖も。而も視ること止み。行くこと遅く。譲然として解く。

一五六三二

一一なる者は。會易なり。之を條理と爲す。氣物分る。性體合す。故に

一五六三三

一なる者は。分中に合す。而して

一五六三四

氣は則ち會易なり。物は則ち天地なり。

一五六三五

往くとして會易天地に匪ざる靡し。

一五六三六

人は口を開けば。則ち皆な會易天地と曰う。

一五六三七

未だ條理を知らず。何を以てか會易天地を知らん。於戲

庖犧氏の後。我れ未だ能く會易を述ぶる者を見ず。蓋し

一五六三八

之を知るの道有り。未だ其の道を得ずして。強いて之を知らんと欲す。

一五六三九

猶お瞽者の文采を思想し。瞽者の律呂を思想するがことし。

一五六四〇

終に思想する所を以て。之が言と爲す。

一五六四一

之を窺竈と謂う。瞽聾は人を欺き。窺竈の説。政を天下に爲す。

一五六四二

汗牛充棟の書。皆な之が羽翼を爲せば。則ち

一五六四三

窺竈は。五家を魁と爲す。五行は。洪範より以來。數千百年なり。

一五六四四

因循薰蒸。何ぞ臭人の臭。屠人の羶と異ならん。然りと雖も。

一五六四五

かれ徵を天地に失すれば。則ち

一五六四六

仰觀俯察の久しきも。疑を生ぜざること能わず。是に於て。

一五六四七

世に稍や五家の妄を議する者有り。

一五六四八

かくぜんとして。肯綮自から分る。

一五六四九
一五六五〇
一五六五一
一五六五二
一五六五三
一五六五四
一五六五五
一五六五六
一五六五七
一五六五八
一五六五九
一五六五六
一五六五七
一五六五八
一五六五九
一五六六〇
一五六六一
一五六六二
一五六六三
一五六六四
一五六六五
一五六六六
一五六六七

妄を知りて未だ眞に遇せず。焉んぞ燭を夜行に秉るに在らんや。
條理なる者は。一一なり。分ちて反す。合して一なり。是を以て。
反觀合一。徵に正に依る。私を以て調停す可きに非ざるなり。夫れ
人なる者は、有意を以て、能く知り能く思う。
天なる者は、無意を以て、能く爲し能く成る。是れ亦た其の反なり。
先達は心を推して物を觀。終に心の爲に私せらる。
美なりと雖も善なりと雖も。天地の本然に非ず。
況んや美と善とに非ざるをや。夫れ
反觀合一。試みに剪刀を執りて。紙を裁して之を觀よ。
一拗一突。一傾一欹。之を合すれば則ち混一無間なり。
天虛地實。氣動物靜。火熱冰寒。雲升雨降。
往くとして然らざる者無し。反觀して合一すれば。則ち
窺窓の鱗漏。自から捨うこと能はず。
故に博洽なりと雖も。聰明なりと雖も。
反觀の門より來らざる者は。則ち之を堂に上せず。
噫窺窓の繇る所。己を推して己に同じからざる者を窺うことに期る。
夫れ天なる者は。人に反する者なり。人を推して天を窺う。
是に於て。天人混ず。其れ天地を譚ずる者は。
一と言つても亦た合す。三と言つても亦た合す。四と言つても亦た合す。五と言つても亦た合す。

一五六六八
有無眞妄。^{うむしんもう。}
惟だ辨の雄なる者勝つ。^{たべんゆうものか}

一五六六九*

一五六七〇

一五六七

一五六七

一五六七三

一五六七四

一五六七五

一五六七六

一五六七

一五六七八

一五六七九

一五六八〇

一五六八

一五六八三

一五六八三

一五六八四

一五六八五

一五六八六

有無眞妄。惟だ辨の雄なる者勝つ。
故に天人の辨は。學者の急務なり。
未だ天人を辨ぜずして。安んぞ瞽聾と聰明とを分たん。
人は苟くも事物を辨するに志し有らば。須く先ず此より始むべきなり。
○物なる者は。體を成して而して立す。故に條理井然たり。
事なる者は。動きて相い交る。故に
運爲紛若たり。條理井然たりと雖も。而も運爲紛若の中に在れば。
古人終に條理の原を探窮すること能わざる者は。
運爲變錯。目。之が爲に眩まするなり。此の故に斯の書の文は。
物に於ては。條理整齋に務め。事に於ては。運爲變錯に出づ。
苟くも事に斯に從わんと欲せば。讀中須く先ず辨すべし。
此れや天。此れや人。此れや事。此れや物なりと。
而して後に以て始めて斯の語を讀む可し。

一五六八七
或いは相い乖く。あるあそむ

一五六八八

一五六八九

一五六九〇

一五六九一

一五六九

一五六九三

一五六九四

一五六九五

一五九六

一五六九八

一五六九

一五七〇〇

一五七

一五七〇一

一五七〇二一

一五七〇四

一五七〇五

或いは相い乖く あるあそむ

故に

天地の性も。亦た天地なり。天地の性も。亦た天地なり。

日影を分つも。亦た氣象なり。

日影を合して。而して虚動に對する
すいそう わか まきしつ

水燥を分つも。亦た氣質なり。

水燥を合して。而して實靜に對するも。

水火も亦た象質なり。

生比の比う。亦ニ比ニ曰う。

化生の化も。亦た化と曰う。

精靈の精も。亦た精と云う。

精力の精も。亦た精と曰う。

精龜の精も。亦た精と曰う。

精乳の精も。亦た精と曰う。

一五七〇六	歲運の運も。亦た運と曰う。
一五七〇七	運轉の運も。亦た運と曰う。
一五七〇八	ちうんの運も。亦た運と曰う。
一五七〇九	運輸の運も。亦た運と曰う。
一五七一〇	こきゅうの運も。亦た運と曰う。
一五七一一	喧嘩の喩も。亦た喩と曰う。
一五七一二	喧嘩の喩も。亦た喩と曰う。
一五七一三	故に外轉内持も。亦た轉持と曰う。
一五七一四	横轉堅持も。亦た轉持と曰う。
一五七一五	喩喩よりする者も。亦た發收と曰う。
一五七一六	鬱肅よりする者も。亦た發收と曰う。
一五七一七	出納する者も。亦た食吐と曰う。
一五七一八	含開する者も。亦た食吐と曰う。
一五七一九	露中。特に對して轉と謂えば。則ち東西を合して。之を轉と謂う。
一五七二〇	運に對して轉と謂えば。則ち象に屬する者運す。
一五七二一	氣に屬する者轉ず。
一五七二二	没中。氣に屬する者轉ず。
一五七二三	古今終始を以てする者を轉と爲せば。則ち
一五七二四	意爲の意は。則ち心性を兼ぬ。

意知の意は。則ち心を分つ。是れ聲同じくして主異なるなり。

一五七二六 一一と曰い。喰易と曰い。氣物と曰い。天地と曰い。

一五七二七 睡覺と曰い。寤寐と曰い。營爲と曰い。營施と曰う。

一五七二八 是れ差別無きに非ざると雖も。而も畢竟一なり。

一五七二九 一に酬酢黜陟と曰い。一に取捨予奪と曰い。一に握手と曰い。

一五七三〇 一に舞踏と曰い。一に言行と曰い。一に言動と曰い。一に云爲と曰うは。

一五七三一 則ち聲主同じからずして其の歸するや一なり。

一五七三二 須く偶する所を以て之を推すべし。條理を繹ぬるの法なり。故に

一五七三四 氣を言え巴。則ち氣物。氣體。氣形。氣質。氣象。天氣。心氣。氣色の類有り。

一五七三五 神を言え巴。則ち天神。本神。神物。神靈。鬼神。神人。聖神の類有り。

一五七三六 天を言え巴。則ち天地。天神。天物。天人。天命の類有り。

一五七三七 全天地の規矩も亦た東西南北を有す。

一五七三八 半天地の衡從も亦た東西南北を有す。

一五七三九 偶する所に由らざれば。則ち將に其の主を誤らんとす。且つ
一氣も亦た氣物を有す。

一五七四〇 大物も亦た氣物を有す。而して

一五七四一 萬物も各おの氣物を有す。是を以て。

一五七四二 没して天を爲し。露して地を爲すと雖も。而も

一五七四四
一五七四五
一五七四六
一五七四七
一五七四八
一五七四九
一五七五〇
一五七五一
一五七五一
一五七五二
一五七五三
一五七五四
一五七五四
一五七五五
一五七五六
一五七五七
一五七五八
一五七五九
一五七六〇
一五七六一
一五七六二

没も亦た天地なり。
露も亦た天地なり。
天も亦た天地なり。
地も亦た天地なり。
往く所皆然り。故に聲主の間は。
偶する所を推して。以て混ずる所を辨するに在り。
條理明らかなれば。則ち其の主に惑わず。
其の主に惑わざれば。則ち杼を曾參の人を殺すに投ぜず。是を以て。
燿燿を暗に比すれば。則ち暗と曰う。
之を焰焰に比すれば。則ち明と曰う。
火を冥冥に比すれば。則ち暗と曰う。
之を昭昭に比すれば。則ち暗と曰う。
轉持を分ちて之を言え。轉に氣と曰い。持に質と曰う。
持中は之を分てば。無質に氣と曰い。有質に質と曰う。
運轉を分ちて之を言え。轉に氣と曰い。運に象と曰う。
象中は之を分てば。曜に象と曰い。影に氣と曰う。
月は象なり。或いは質と曰う。水は質なり。或いは氣と曰う。
猶お狗の牛より小にして。而して鼠に比して大と曰うがごとし。
蠍の蛇より短にして。而して蛭に比して長と曰うがごとし。

一五七六三

一五七六四

一五七六五

一五七六六

一五七六七

一五七六八

一五七六九

一五七七〇

一五七七一

一五七七二

一五七七三

一五七七四

一五七七五

一五七七六

一五七七七

一五七七八

一五七七九

一五七八〇

一五七八一

一五七八二

一五七八三

東家の西を呼んで。西家の東と爲すに惑うこと勿れ。

○人の物に遇うや。必ず其の名を命ず。此れ之を命ずれば。則ち彼れも亦た之を命ぜ。 (I 381b)

名の毎に物より多き所なり。然りと雖も。

物なる者は。其の體嚴然たり。人の共に覗て言う所なり。

氣なる者は。漠然たり。得て覗る可からず。

視されば則ち識らず。識らざれば則ち安んぞ得て之を命ぜん。

是れ氣の毎に名に乏しき所なり。蓋し條理の剖析は。

覗る可からざるが若しと雖も。而も粲然として前に立つ。

已に其の粲立する者を獲て。未だ其の名を得ず。竟に我より之を命ぜ。

氣物に没露と曰い。天地に通塞と曰うがごとき是れなり。

日に反して影を覗る。水に反して燥を覗る。

是れ古人の未だ名を命ぜざる所なり雖も。條理は自から其の主を有す。

言わざを欲すと雖も。而も得ず。新名の無きことを得ざる所なり。

故に是れ未だ對に反比有るを識らざるなり。故に

(欄外追記につき削除。)

先達は未だ條理を詳かにせず。近きを以て正に混ず。是に於て。

方を以て正しく圓に對し。月を以て正しく日に對する者の如きは。

是れ未だ對に反比有るを識らざるなり。故に

正しく直を掲げて方に換え。影を掲げて月に換う。

木なる者は。草と植を相い爲し。鳥獸の動に對す。

一五七八二
一五七八三
一五七八四
一五七八五
一五七八六
一五七八七
一五七八八
一五七八九
一五七八九〇
一五七八九一
一五七八九二
一五七八九三
一五七八九四
一五七八九五
一五七八九六
一五七八九七
一五七八九八
一五七八九九
一五七八〇〇

白なる者は。日の色。以て黒に對す。
赤なる者は。白の黒を帶びて。暗の明に接するの青に對す。而して
木を以て金に對し。赤を以て黒に對するは。是れ
條理を錯亂する者なり。衾易の位は。則ち右易左衾なり。
赤白の色は。則ち白易赤衾なり。
今木を以て金に對し。赤を以て黒に對するは。是れ
赤白の色は。則ち白易赤衾なり。
○臓腑の分は。則ち腑易臓衾なり。而して
世を擧げて之を倒置す。已に天地條理の在る有り。
罪を先達に獲ると雖も。而も敢えて從わず。
○伯樂は弟子をして良馬を求め使む。弟子散じて四方に之き。
纔に其の高踏善鳴する者を見て。便ち以て駿と爲し。相い共に其の良を争い。
久しくして決せず。一人直ちに走つて龍種を得て。夫の高踏善鳴を見て顧みず。
是れ其の眞を得て。而して不良自から捨わざるなり。
世の天地を譚じ。造化を論じ。是非を辨ずる者は。
未だ其の眞を得ずして。自ら得る者を以て是と爲す。
相い齋て準を立て。人をして之に據ら使む。準を天地に取るに非ざるなり。
世の未だ眞龍を見ざる者。意を以て驛驅綠耳と呼ぶ。
宜なるかな。駿騋は目を眩ます。夫の五家の如きは亦た配當のみ。而して
衾易は則ち對侍なり。
對侍なる者は。天地の條理なり。

一五八〇一

一五八〇二

一五八〇三

一五八〇四

一五八〇五

一五八〇六

一五八〇七

一五八〇八

一五八〇九

一五八一〇

一五八一一

一五八一二

一五八一三

一五八一四

一五八一五

一五八一六

一五八一七

一五八一八

一五八一九

配當なる者は。人爲の處置なり。

天地は安んぞ彼の配を知らん。是を以て。

男女は。偶なり。

夫婦は。配なり。

男女を以て夫婦を配す。配の善なる者なり。

善と雖も亦た人なり。故に

夫婦は轉ずること有り。男女は變ずること無し。天人の別なり。

其の善なる者も猶お轉ず。況んや其の不善なる者をや。

萬品を彙めて。之を五行に配す。其の言に曰く。

東は木なり。西は金なり。東は青なり。西は白なりと。

是れ之を聲主を混ずると謂うなり。

東を東にし。木を木にし。西を西にし。白を白にす。

主當り名稱えて。而して眩する所無し。偶の眞なり。

配に由りて妄を病むは。學を以て蔽を得るなり。是の故に。

まさに事物の然る所を知らんと欲すれば。則ち須く

將に事物の然る所を知らんと欲すれば。則ち須く

水を觀て水と爲し。火を觀て火と爲し。

水を觀て水と爲し。明を觀て明と爲すべし。

幽を觀て幽と爲し。明を觀て明と爲すべし。

宜しく對待を以て反觀すべし。宜しく一一に就きて剖析すべし。

晉は無似たりと雖も。竊かに茲に見ること有り。

一五八二〇

一五八二一

一五八二二（復元）

一五八二三（復元）

一五八二四（復元）

一五八二五

一五八二六（復元）

一五八二七

一五八二八（復元）

一五八二九

一五八三〇

一五八三一

一五八三二

一五八三三

一五八三四

一五八三五

一五八三六

一五八三七

一五八三八

其の確乎として固執する者は。徵天地に在ればなり。徵天地に在るとは。何ぞや。

今嘗みに語を擧げて人に問うて、

天下をして暝焉として夜ならしめる者、廻ち地の影なりと曰わば、

人將に答えて曰く

地上をして灼熱として晝ならしめ、

而して其の體を聚める者、廻ち天の日なりと

（欄外朱書追記につき、もと一五八二六一二二を削除。）

又た半を擧げて之を問わん、

冬にして水の凝りて、而して天より地に降る者は、則ち雪と、

彼れ將に半を擧げて之に答える。

夏にして火の發し、而して地より天に升る者は、則ち雷と、

是に於て我れは半を言ひて。而して人は其の半を知る。

徴果たして天地に在ればなり。

○徴果たして天地に在ると雖も。而も條理の道は微なり。奚ぞ言い易からんや。（PA 037）

われは造物者に非ず。詎んぞ能く條理を盡くさん。詎んぞ能く條理を盡くさんなれば。則ち斯の編豈に恃む可けんや。然りと雖も。條理は則ち天地の準なり。

若し得ざる所の者有らば。則ち晉の未だ良馬に遇わざるなり。

若し此に人有りて。條理の正を執りて。以て晉の得ざる所を質せば。則ち

天地安んぞ晉の不能を護らん。是非なる者は。條理の在る所なり。

聖人復た起るとも。豈に之に易うるを得んや。是を以て。

一五八三九

一五八四〇

一五八四一

一五八四二

一五八四三

一五八四四

一五八四五

一五八四六

一五八四七

一五八四八

一五八四九

一五八五〇

一五八五一

一五八五二

一五八五三

一五八五四

一五八五五

一五八五六

一五八五七

是非の道。取捨の行。幽明の途。善惡の性は。

門を設け戸を張り。千古了せず。條理之を講ぜざればなり。

條理一たび立ちて。宇宙一匹の文錦と爲る。

若く文采燦爛。雲飛び霞涌き。鸞鳳華卉。鬱乎として目に盈つも。

一經一緯。由りて來る所有り。

巧婦の意匠。奚んぞ得て逃れん。而して後火焼の水漬に一に。

鱗潛の翼飛に妨げず。川流は敦化して。左右は原に逢うを知る。

是れ圖の剖析反合を示す所以なり。惟だ其の習する所。

目濡れ心染み。窺窓を執りて。而して條理を駿す。

所謂。是も亦た一無窮。非も亦た一無窮にして。而して亦た

物の偶有る所なり。

○玄語已に艸す。直に其の見る所を説く。重ねて贊語十數萬言を著す。

衆説を會して。之を鄙表に断ず。贊とは。玄に贊するなり。

善く玄を讀む者は。贊を用うる莫し。天地已に在り。

而して又た役を筆硯に屬すれば。則ち玄も亦た已に贊す。

善く觀察する者は。又た玄を用うる莫し。然りと雖も。

觀察の徵。條理灼然たり。而して人は今に至りて之を講ぜず。

晉を俟つて之を言わしむれば。則ち此の語も亦た廢す可からず。

此の語の廢す可からざるは。果たして是か。

一五八五八
一五八五九
一五八六〇
一五八六一
一五八六二
一五八六三
一五八六四
一五八六五
一五八六六
一五八六七
一五八六八
一五八六九
一五八七〇
一五八七一
一五八七二
一五八七三
一五八七四
一五八七五
一五八七六

贊も亦た用う可し。是を以て。贊は玄に贊すと雖も。事は則ち相い出入す。
彝倫の教は、司徒の職は已に設けられしより、其の道に遺漏無し。
形骸の議は、素靈の學行われしより、世を擧げて表準と爲す。
然りと雖も。彝倫の教は則ち備り。

其の條理は則ち遺す

形體の説は則ち有り

其の條理は則ち罔し 是に於て。

彝倫の次序。形體の分屬の如きに至りては。則ち玄に略す。而して

贊に詳かにす。蓋し夫れ人學びて天人を窮め。目 天地を空すと雖も。

然れども亦た斯の躬還つて此に在り。此の故に。斯の人を捨てて。

目を彝倫の外に瞠す。曠しいかな。

申ねて彝倫を明らかにして。敢語一巻あり。以て畢る。

玄語の如きは。則ち言論古人に假ること無し。

贊敢は世と酬酢の態を爲す。便ち玄の無き所にして。而して贊敢の設くる所なり。

則ち亦た併せ讀まずんばある可からず。蓋し引く所の語は。
全き者有り。略する者有り。意を取りて文を換うる者有り。
所出を記す者有り。所出を記せざる者有り。

我が文中に籀する者有り。其の本志を失する無きが若きは。
君子幸いに恕せよ。而して其の古典を引き。衆説を考うるは。猶お眇視蹙行。

一五八七七

一五八七八

一五八七九

一五八八〇

一五八八一

一五八八二

一五八八三

一五八八四

一五八八五

一五八八六

一五八八七

一五八八八

一五八八九

一五八九〇

一五八九一

一五八九二

一五八九三

一五八九四

一五八九五

○將に大いに博洽の笑を招かんとす。

天地洪蕩たり。實に筆硯の盡くす所に非ざるなり。

故に此の書を讀むのは。須く先ず條理の分。統屬の所在を知るべし。

譬えば火を擧げて之を言え。則ち雷霆隕流。皆な此の屬なるを知り。

馬を擧げて之を言え。則ち羊鹿駝麋。皆な此の屬なるを知るが如し。

故に亦た須く必ず知る可し。輕重浮沈は。虛實の間。

奇偶多寡は。數中の事。

没露有無は。體中の事。

長短大小は。形中の事なるを。

而して能く統と散とを辨ず。解結聚散。榮枯死生。

名は則ち 各當たる所有り。

事は則ち 各 統ぶる所有り。

其の零碎に至りては。盡く紀極する能わず。是に於て。

事物の散する者に於て。要は條理を以て統べ。零碎は以て之に屬するあり。且つ

天地なる者は。天地なるのみ。

觀て之を論ずる者は。人なり。

天地なる者は。天地なるのみ。

故に我を擧げて以て天地に對すれば。擧ぐる所の我は。有意なり。

對する所の天地は。無意なり。天人の間。意の有無のみ。

一五八九六
 一五八九七
 一五八九八
 一五八九九
 一五九〇〇
 一五九〇一
 一五九〇二
 一五九〇三
 一五九〇四
 一五九〇五
 一五九〇六
 一五九〇七
 一五九〇八
 一五九〇九
 一五九一〇
 一五九一一
 一五九一二
 一五九一三
 一五九一四

意の有無を混すれば。則ち識は皆な窺窓に墜つ。故に
 言を知るの要は。辨天人に在り。其の
 死生通塞は。天なり。
 殺活予奪は。人なり。
 人の私よりして。而して天の公を觀る。
 天の爲よりして。而して人の作を分つ。
 天成は爲に偶す。
 人成は敗に偶す。
 而して
 人中。死生睡覺するは則ち天なり。
 運用營爲するは則ち人なり。是れ天人の辨なり。是を以て。
 慢怨は。天に得るの徳なり。
 仁義は。人に在るの道なり。
 學禮は。之を修むの物なり。
 榮辱は。之を成すの事なり。
 苛くも類に触れて之を推し。引きて之を伸べずんば。
 紛若たる事物は。言の盡くす可きに非ざるなり。
 ○人有れば必ず言有り。言有れば必ず名有り。是以て。
 我が方の物に名づるは。固に西土に假ること無し。蓋し漢字の我に入るは。
 國史以て。應神の朝に創らると爲す。然れども山海經よりして下。

一五九三五

一五九三六

一五九三七

一五九三八

一五九三九

一五九四〇

一五九四一

一五九四二

一五九四三

一五九四四

一五九四五

一五九四六

一五九四七

一五九四八

一五九四九

一五九五〇

一五九五一

一五九五二

一五九五三

彼此共に用う可き者有り。是に於て。

或いは彼此能く合す。或いは考合紛紛す。

是れ 本邦の漢字を用うるの難なり。蓋し

人の博物。實は須く務めて相い得るべし。名は須く主人に従うべし。

況んや諸方の物を出だすこと一ならざれば。則ち彼此何ぞ吻合せん。

粗しに一二を擧げて之を例せんに。世に川童と稱する者有り。

形は獮猴の如く。水艸の際に出没す。正名を命ずる者は。

水虎 魚虎を掲げて標し。又た水蠶を掲げて標す。而して川童を以て標せず。

異名を以て。本稱を變す。正名を欲して。而して反つて其の實を失す。

此の間に猿無し。獮猴を呼びて猿と爲す。又た疾風を以て嵐と爲し。

烟を以て霞と爲す。洋を以て灘と爲す。海口を以て江と爲す。

これ を用いざれば。則ち世に通ずること能わざると雖も。

而れども文に臨んで則ち取捨せざる可からず。

かれ に蟻蛸と稱し。我に長脚蜘蛛と稱する類のごときは。則ち彼れ雅なり。

かれ に棘鰐魚と稱し。我に鯛と稱し。平魚と稱する類の如きは。

(欄外追記につき削除。)

則ち我れ雅なり。何ぞ又た彼れに譲ることあらん。

胄を以て甲と爲し。鋤を以て鍬と爲すが如きは。則ち

誤りの甚だしき者。豈に從うことを得んや。

一五九五四

一五九五五

一五九五六

一五九五七

一五九五八

一五九五九

一五九六〇

一五九六一

一五九六二

一五九六三

一五九六四

一五九六五

一五九六六

一五九六七

一五九六八

一五九六九

一五九七〇

一五九七一

一五九七二

われの鳶・桜・楓の如きは。久しく其の稱を専らにす。

われの所謂鳶なる者は。彼の倉庚に非ず。是に於て

正名は、剖葦と曰い。婆餅焦と曰い。報春鳥と曰う。

鳶を以て標すれば則ち定まる。人の見る所を以てすれば。甲乙丙丁。名は常に轉す。

桜 楓 皆然り。夫れ龍なる者は。鱗類なり。而して馬も亦た龍と曰う。

斗なる者は。量器なり。而して星も亦た斗と曰う。則ち同名何ぞ嫌せん。

今 我の椿と稱する者。國史は海石榴と稱す。

海石榴は酉陽雜俎に出づれば。則ち蓋し李唐の傳うる所の名なり。

或ひと曰く。今 我の椿は。即ち彼の山茶にして。而して

我が邦の山茶は即ち彼の海紅なりと。然りと雖も。

亦た我の稱に従う。此の間の杜若は。彼の燕子花を誤れるなり。

彼の邦の人。我が邦の事を稱すれば。桜と曰い。椿と曰う。

誤ると雖も。而も本稱を以て古籍を改め難ければ。則ち

我の杜若は。迺ち彼の燕子花なり。猶お今之蘭。古の蘭に非ずと雖も。

共に蘭と稱す可し。其の名を奪う可からざるがごとし。

苟くも其の眞を知らば則ち何ぞ夫の仙陀婆に惑わん。

神木 鯉魚、海鼠の類の如きは。我れ自から正稱有り。

海雀 稲郎等の如きは。我れ自から雅呼有り。又た

かれに薛と曰い。我に野老と曰い。

一五九七三
一五九七四
一五九七五
一五九七六
一五九七七
一五九七八
一五九七八
一五九七九
一五九八〇
一五九八一
一五九八二
一五九八三
一五九八四
一五九八五
一五九八六
一五九八七
一五九八八
一五九八九
一五九九〇
一五九九一

かれに鰐と曰い。われに海老と曰うの類は。
諸を漢語和名等の書に收むれば。則ち共に通稱す可し。又た

葦鹿の訓に従いて書し。於胡の音を假りて書す。

亦た同じく通ず可し。是を以て操觚の間は。

消息せざること能わず。朝廷。考文の治久しく廢し。

爾雅の舉未だ有らざれば。則ち

消息して之を分曉にせんと欲すると雖も。業。又た晉の私に出づれば。則ち
復た見る者をして鼠璞を混淆にせしめんとす。故に方名を用いて呼ぶ者は。
雙黒系を以て之を分つ。且つ條理の道。未だ講ぜず。

見に従いて名を命じ。意に隨いて類を分つ。是に於いて

庶物の品類は。未だ條理に合せず。

此の書の業は條理に在り。杜撰なりと雖も。意に舊稱無き者は新たに名を命ず。

類を分つは。専ら條理に由る。

日の分は。星を以て之に屬し。

月の分は。辰を以て名を立す。歲年の別は。周の官注に曰く。

朔數に年と曰う。

中數に歲と曰う。

その説は分曉なり。故に

ひ日の一周天なる者を以て、

歲と曰う。

(PA 047)

(I 383b)

(PA 048)

一五九九二
一五九九三一九四
一五九九五
一五九九六
一五九九七
一五九九八
一五九九九
一五九九九
一六〇〇一
一六〇〇二
一六〇〇三
一六〇〇四
一六〇〇五
一六〇〇六
一六〇〇七
一六〇〇八
一六〇〇九
一六〇一一〇
一六〇一二

月の十一會なる者は。植の分なり。柔小にして
艸木なる者は。枝幹の體に正なる者は、
枝幹の體に變なる者は、名して**芻蔓**と。
芻蔓なる者は、枝幹の體に正なる者は、
枝幹の體に變なる者は、名して**芻樹**と。
芻蔓は艸木を具す。類の分たざるを得ず。
蟲は飛走の一を有す、飛に蟲と曰い。
菌は剛柔の一を有す、柔に菌と曰い。
陸は鳥獸艸木を有す、而して
水は鱗倮藻樹を得る、而して
剛中。植は金石土齒を有す、而して
動は螺甲龜蟹の類を有す、而して
造名は、則ち晉の私に出づ、而して
分類は、則ち條理の天に由る、而して
質なる者は、雨水土石艸木の類にして、
象なる者は、日月雲煙の類にして。

一六〇一三
一六〇一四
一六〇一五
一六〇一六
一六〇一七
一六〇一八
一六〇一九
一六〇二〇
一六〇二一
一六〇二二
一六〇二三
一六〇二四
一六〇二五
一六〇二六
一六〇二七
一六〇二八
一六〇二九
一六〇三〇
一六〇三一

形なる者は、
體なる者は、
氣に對して物を擧げ。理に對して故を説く。
宇宙天地と。天神本神と。私意に出づるが如しと雖も。實は之を條理に正す。

故に聲は同じと雖も。而も主は同じからず。
是れ其の専ら古訓詁に據り難きなり。儒家は。百家と相い區畫する者なり。

故に體用を言えば則ち曰く。是れ先王の法言に非ずと。

心思を説けば。則ち是れ浮屠氏の事業と。

夫れ今 西學入れば。則ち天下の天を譚ずる者。己を捨てて之に從う。
眞に護る所有ればなり。火器入れば。則ち天下の武を用うる者は。甘んじて之に習う。
利は此れより善きは莫ければなり。諸を天地に徵して而して有らば。

(I 385a)

(PA 050)

則ち菟葵狂夫も奚んぞ廢せんや。況んや百家をや。假りに

水穀鹽蔬の用無くんば。之を牛溲馬勃。敗鼓皮に若かずと謂う可きや。

是を以て晉は則ち忌わざるなり。

(朱書追記につき削除。)

○書有りて通じ難きは。傳注の起る所なり。

周易の十翼。魯史の三傳よりして。而して爾雅訓詁を爲り。

夏小正解通を爲す。

後世の注は。皆な訓詁解通なり。

獨り裴松之の三國志に於る。劉孝標の世說に於る。

*一六〇三一

*一六〇三三

*一六〇三四

*一六〇三五

*一六〇三六

*一六〇三七

*一六〇三八

*一六〇三九

*一六〇四〇

*一六〇四一

*一六〇四二

*一六〇四三

*一六〇四四

*一六〇四五

*一六〇四六

*一六〇四七

*一六〇四八

*一六〇四九

*一六〇五〇

輯補を以て注を爲す。亦た一體なり。

晉の斯の書に於るや。大なる者は提げ。小なる者は從え。ば。則ち後世綱目の設。幾し。然りと難も其の細書する者は。或いは本文の言わざる所に出し。

あるいは本文の既に言う所に收む。

出入先後は。復た前例に規規たらず。

讀者は須く融して之を通すべし。

○伏して天地の化育を觀るに。水火は性を異にすと雖も。而も

竝育せられて相い害せず。

聖人の天下を治む。能く衆情を容れて。而して模範の中に陶冶す。

惟だ周禮を讀みて。而して後聖人の心の天地の若くなるを知る。

聖人の心。愚を愍み異を容れ。賢愚利鈍。各其の情を伸ばし。

各おの其の力を竭し。各其の處を得るに在るなり。

先王の道衰え。諸士口舌を以て。天下の治を説き。

己の見る所を以て。己の非とする所を排す。

門戸を互いに設け。是非各張る。之に加うるに佛老を以てす。

道は政と離る。其の相い是非する者を以て天下を治めんとす。是に於て。政に従う者も。亦た此れを以て心と爲す。水を以て火を惡み。裘を以て葛を忌み。赤子を分ちて。而して諸を愛外に置く。

一六〇七〇

一六〇七一

一六〇七二

一六〇七三

一六〇七四

一六〇七五

一六〇七六

一六〇七七

一六〇七八

一六〇七八〇

一六〇八一

一六〇八一—1復元

一六〇八一—2復元

一六〇八一—3復元

一六〇八二

一六〇八三

一六〇八四

一六〇八五

一六〇八六

孟子の下に出でざれば。則ち諸家と雖も。而も廢す可からざるなり。夫れ
天下の善惡利鈍に擾擾たるは。
猶お高きに登りて雲霧烟霞。山澤江湖。竹樹鳥獸の雜然たるもの望むがごとし。
是の天能く此の雜然たる者を容る。
此の君能く此の雜然たる者を保す。此の故に。周禮より之を觀れば。則ち
老墨中韓も。亦た儒なり。道を分つよりして之を觀れば。則ち
儒者は。先王の法服を服し。先王の法言を唱える者なり。
是を以て儒者の道は善なりと雖も而も九兩の一に出でず。是に於て。
各おの其の徳とする所を徳とし。各おの其の道とする所を道とし。
以て分界を爲す。分界一たび立ちて。其の地狹し。狹ければ争う。争えば鬭う。
鬭えば則ち其の非を相い見て。其の是を相い知らず。是非中らざれば。
以て相い服するに足らず。愈いよ攻めて愈いよ叛き。愈いよ廣めて愈いよ狹し。
其の同じくする所を以て。而して道に由るは。天地の心なり。
否らざれば則ち己に於るなり。其の可を衒いて。而して其の不可を護す。
人に於るや。其の可を遺して。而して其の不可を拾う。
擾擾たる生民は。我と同胞なり。奚んぞ區域を相い争うの中に爲さん。夫れ
善なる者は。人の悦ぶ所なり。
悪なる者は。人の怨む所なり。
是は。人の榮とする所なり。

一六〇八七

一六〇八八

一六〇八九

一六〇九〇

一六〇九一
一九一

一六〇九三

一六〇九四

一六〇九五

一六〇九六

一六〇九七

一六〇九八

一六〇九九

*一六一〇〇

一六一〇一

一六一〇二

一六一〇三

一六一〇四

一六一〇五

一六一〇六

非は。人の辱とする所なり。

諸を四方に推し。諸を古今に建てて。公然たる者なり。

今夫れ善を爲す者は。將に人の不善を治めんとす。

將に人の不善を治めんとして。而して行を不善を絶つことに危うくす。

不善は路を善に入るに失して。竟に激して害す。其の名は則ち美なり、

其の實は則ち損なり

孰か其の咎を執らん。

晉は寒郷の一農なり。幸いに日月の休明に値い。竊かに聖澤の洪蕩を窺う。

徳は天地と竝び行われ。物は各おの其の處を得る。

衆の悦怨する所にして。而して善惡を知り。

衆の榮辱する所にして。而して是非を考う。

賢と無く愚と無く。同と無く異と無く。四海兄弟にして。而して

大父の膝上に教育せらる。伏して惟んみるに。晉は則ち王者の民。

竊かに天地に窺うこと有り。

亦た相い與に樂しんで。優遊して歳を卒う。

其の門戸を開く者にして入り。其の門戸を閉ずる者にして入らず。

各家の學を守つて。専ら一門に據ること能わず。

我れ棄てて而して彼れ之を捨い。

(PA 055)

(I 386a)

(PA 056)

一六一〇七

一六一〇八

一六一〇九

一六一〇〇

一六一一一六

一六一一七

一六一一八

一六一一九

一六一二〇

一六一二三

一六一二三

一六一二三

一六一二四

一六一二五

一六一二六

一六一二七

一六一二八

一六一二九

一六一三〇

我れ非として而して彼れ之を是とす。大同に非ざるなり。

故に之を是非するに。天地を以てし。之を取捨するに。天地を以てす。

言ひて失する有らば、晉の天地に肖ざるなり。

言ひて得る有らば、晉の天地と肖るなり。

(行間追記につき削除。)

○宝暦癸酉の歳。晉年三十一にして始めて此の艸有り。

繼いで贊敢の一語有り。

贊は宝暦丙子に始まり。癸未に至りて。八たび年を踰え。

十たび稿を換えて今の本に至る。凡そ七冊なり。

敢は宝暦庚辰に始まり。癸未に至りて。四たび年を踰え。

四たび稿を換ゆ。今の本に至りて。一冊と爲す。

今茲。門人之を梓に上す。

此の語は癸酉に始まり。明和乙酉に至りて。換稿十五たび。

ついに大いに憤憤たるを覚え。盡く舊稿を棄て。新たに艸を起す。

四年を越えて戊子に至り。三たび艸を換え。稍や安きが若し。

休すること一年。再び之を思うに。天地に於て。大いに合せず。

庚寅の冬。又た舊稿を棄てて。此の稿を起す。又た六年を経て

五たび換えて纔に此の稿を得たり。四冊七本。例旨を併せて凡そ八本。

(行間追記につき削除。)

一六一三一

歷年一十三。

換稿も亦た一十三。

一六一三二

れきねんにじゅうさん。

かんこうもよ

にじゅうさん

既に半百を過ぐ。

一六一三三

ぶつ

物は大にして事は衆し。

けんぱ

犬馬の歯。

既に半百を過ぐ。

一六一三四

ひんぱつは

鬢髮皤皤。

繼續いで心胸の病を以てす。

しんきょう

既に半百を過ぐ。

一六一三五

まさ

將に其の業を卒わしめんとするか。

まさ

將に天は之に年を假し。

まさ

既に半百を過ぐ。

一六一三六

まさ

將に其の志を奪わんとするか。

まさ

既に半百を過ぐ。

一六一三七

まさ

是に於てか感無きこと能わず。

あた

書して以て佗日を俟つ。

まつ

既に半百を過ぐ。

一六一三八

まさ

安永四年端午識す。

あんえいよ

既に半百を過ぐ。

既に半百を過ぐ。

既に半百を過ぐ。

既に半百を過ぐ。

既に半百を過ぐ。

既に半百を過ぐ。

既に半百を過ぐ。

玄語例旨

(I 386b)
(PA 058)

梅園全集版玄語で「附言」とされた部分は、書き下ろし後の綴じ込みの可能性があり、それを行つたのが梅園か黄鶴か不明であるので、書き下ろし直後の玄語の復元を目的とする本資料からは除外した。ただ内容は、玄語を理解する上で極めて重要なので別ファイルとして添付する。訂正は理解にとつて有益であれば採用した。また同様の理由から、読み下し版では小細字の傍記も抹消せずに載せた。

なお、これを中期の稿本からの転記とする指摘もあるが、いずれにせよ、安永本・淨書本に比べると語の用法にいささかの相違があり、それを●で消して訂正し、統一性を持たせようとしていることが窺える。

終りに近づくにつれて訂正が甚だしくなり、最後は書きなぐりの状態となつてゐる。併せて、途中にも判読困難なところがあり、これらは訂正を採用した。また一六一四七以下はほぼ一頁にの全面小細字による記述で甚だ読みづらい。またこの部分は、文字が同様の小細字である一六一三九からさらに離されて書かれている。しかし、前述の通り、このいわゆる附言は、玄語を理解する上で貴重である。

一六一四一
一六一四二
一六一四三
一六一四四
一六一四五
一六一四六
一六一四七
一六一四八
一六一四九
一六一五〇
一六一五一
一六一五二
一六一五三
一六一五四
一六一五五
一六一五六
一六一五七
一六一五八
一六一五九

○天冊の天なる者は、性なり、鬱浡の活なり、
地冊の地なる者は、體なり、混沌の立なり、
地冊一部は、没と爲し露と爲す。
一部四界。天界の目を、宇宙と曰い、方位と曰う、
機界の目を、轉持と曰い、形理と曰う、
體界の目を、天地と曰い、華液と曰う、
性界の目を、日影と曰い、水燥と曰う、
方位なる者は、宇宙の痕なり、
形理なる者は、轉持の靜なり、是に於て
宇宙轉持は綱を爲す、
天地華液なる者は、性體の物なり、
日影水燥なる者は、性體の氣なり、是に於て
天地華液を綱と爲す、一二分合の別より之を剖せば、宜しく先ず
天地の動、
形理の靜を以て、没中の動靜天地を探り。而して
天地の體、
華液の性を以て、露中の體性天地を偶して。
以て其の條理を繹ぬべし。宇宙なる者は精なり。
自から方位を以て、天地を爲す。而して

*一六一六〇

一六一六一

一六一六二

一六一六三

一六一六四

一六一六五

一六一六六

一六一六七

一六一六八

一六一六九

一六一七〇

一六一七一

一六一七二

一六一七三

一六一七四

一六一七五

一六一七六

一六一七七

一六一七八

宇宙なる者は則ち衰衰の通、能く宇内に潛む。

是を以て一字は没露の一球を爲す者を容る。而して天地立つ。

天地は體を以て物を成す、

華液は性を以て物を成す、

日影は性氣を以て播す、

水燥は性用を以て布く、

華は則ち日影なり、

液は則ち水燥なり、

水火なる者は本と持中の物なり。

或いは以て華液と爲す。蓋し水火の稱。地に於ては專主有り。

拡げて華液を稱す。天に在つては日月を言う。皆な其の性に因りて言う。

體界に於て既に華液を言い。又た性界に於ても日影水燥を言う。

贅を爲すが如き然り。

蓋し一なる者は體して合す、以て其の條貫を成す、

一なる者は分ちて反す、以て其の理析を説く、

火の虚の象、

水の實の質、皆な物なり。

天地華液は。體性を隔つと雖も。而も同じく體を有す。而して

華液は反を以て反に對し。具を以て闕に向う。

一六一七九
 一六一八〇
 一六一八一
 一六一八二
 一六一八三
 一六一八四
 一六一八五
 一六一八六
 一六一八七
 一六一八八
 一六一八九
 一六一九〇
 一六一九一
 一六一九二（復元）
 一六一九三
 一六一九四
 一六一九五—九六
 一六一九七
 一六一九八

合せざれば。則ち此を成すこと能わず。故に體界の華液なる者は。
 虚象の物を以て實質の物に偶す。而して
 其の成る所は。此れに合して彼に成り。彼に合して此に成る。
 華液は既に體界に於て物を爲す。物は自から己の氣を有す。故に
 性界は、則ち日影は則ち寒熱の氣、明暗の色を播す、
 水燥は則ち乾潤の性、滋煦の才を布く。故に
 條貫は脈の通を觀る、
 理析は用の別を觀る、是を以て
 天地華液は。相い得て一球を成す。而して
 日影水燥は。各おの不占心の兩圈を領し。政を上下に布く。是に於て
 宇一は没露の一球を容る。
 一球は連環を分つ。是に於て宇なる者は、
 故に地冊を讀む者は。先ず宜しく目意を解すべし。　（一六一九五とやや重なる。）
 宇は則ち一中に方位を具し。轉持天地を合して之を容る。而して
 其の華液は既に其の體を立す。體立ちて其の性氣は其の才用を施す。
 地冊を讀む者は。宜しく先ず此の意を識りて。而して後天地を探るべし。
 ○一なる者は數えずして足る。故に
 之を剖して破す可からざるに至るも、猶お一を盡さず。

*一六一九九一〇〇

一六一〇一

一六一〇二

一六一〇三

一六一〇四

一六一〇五

一六一〇六

一六一〇七

一六一〇八

一六一〇九

一六一二〇

一六一二一

一六一二二

一六一二三

一六一二四

一六一二五

一六一二六

一六一二七

一六一二八

之を加えて載す可からざるに至るも猶お一に至らず。強いて一元氣と曰う。

これをくわへて載す可からざるに至るも猶お一に至らず。強いて一元氣と曰う。

一を擧げて一を闕く。具を言ひて闕を見す。故に玄なり。

或ひと之を聞きて曰く玄にして玄ならば。則ち何ぞ玄を用いん。

あるこれきを聞きて曰く玄にして玄ならば。則ち何ぞ子の言に待たん。

玄にして玄ならずんば。則ち何ぞ玄を用いん。

玄を言ひうを待ちて而して後玄ならば。玄は玄と爲すに足らず。

玄。玄を言ひうを待たずんば。何ぞ子の玄に益さんと。曰く故に玄なり。

○天地を以て会易を剖けば、天地は各おの会易を具す。

会易を以て天地を觀れば、会易は各おの天地を具す。

○天地を以て会易を剖けば、天地は各おの会易を具す。

会易を以て天地を觀れば、会易は各おの天地を具す。

○條理を講ずる。須く剖析對待の經緯を審かにすべし。

剖析すれば則ち一にして二なり。

對待すれば則ち一にして二なり。

剖析すれば則ち一にして二なり。

對待すれば則ち一にして二なり。

○會成易成の圈は。會成易成の天地と。同じからず。

天圈と曰い、日影の圈と曰うは、便ち易成の圈なり、

地圈と曰い、水燥の圈と曰うは、便ち會成の圈なり、

共に不占心の環にして。分れて一を成す。

轉持形理の沒、

一六二二九

天地華液の露

一六二二〇

共に心を中に占め。

合して一を成す。

一六二二一

圓は外圓に就きて言い。環は中虛に依りて言う。

一六二二三

天地の形は其の圓きこと毬の如し。故に

(一六二二一一七)

小細字傍記。)

一六二二四

地球は即ち地毬なり。水火の地は其の上に襲なる。

一六二二五

或いは併せて實毬と謂う。或いは地毬實毬を分つ、

一六二二六

日月の毬は水燥の上に襲なる。

一六二二七

或いは天を併せて虚毬と謂う。或いは天毬虚毬を分つ、

一六二二八

○直圓は其の正に就きて言う。規矩は持平に由りて言う。

一六二二九

○直圓は其の正に就きて言う。意。稍や異なるなり。

一六二二〇

西中東中○西線東線は。即ち赤道黃道なり。

一六二二一

守軸環軸は。即ち赤軸黃軸なり。處に從いて其の聲を異にする。

一六二二二

主の異なるに非ざるなり。

一六二二三

○性界なる者は。天地華液の物を體に歸して

*一六二二四

輪軸と曰い。弦弧と曰う。假りて譬える所異なるのみ。

一六二二五

○色氣性才の氣を性に歸するの稱なり。

一六二二六

色界なる者は。明暗を以て天地の體を分つの稱なり。

一六二二七復元

是に於て體界に對するの性界は。色界に對するの性界と。自から別有り。

一六二二八復元

○體界に言ふ所は。則ち天地華液の體なり。

一六二二九

(一六二二一一六 小細字傍記。)

一六一三四四

一六一三五

一六一三六

一六一三七

一六一三八

一六一三九

一六一四〇

一六一四一

一六一四二

一六一四三

一六一四四

一六一四五

一六一四六

【これ以下、判読甚だ困難な小細字による草稿】

○一なる者は數えずして足る。故に之を剖して破す可からざるに至るも。
猶お一を盡くさず。之を加えて載す可からざるに至るも。一に至らず。
故に強いて命じて一元氣と曰う。

○性界に言う所は。則ち色氣性才の用なり。

然り而して性中は色を明暗に屬す。

性を乾潤に屬すれば。則ち亦た色界に對するの性界有り。

○明暗に色と曰い。黑白に彩と曰い。氣に交と曰い。物に接と曰う。條理の言なり。

然れども散言は。通稱に從う。

○人身の液に。數義有り。曰く

氣液の液なる者は。氣に對するの名にして。身中の滑澤なり。

血液の液なる者は。血に對するの名にして。表に在る者なり。

裏に在れば則ち濁りて赤し。血の謂なり。

表に出れば則ち清みて淡し。液の謂なり。故に

液の分たるる者は。皮表なり。而して

經中の氣。脈中の液も。又氣液の對名なり。

氣液と稱すも。骨肉の氣液と別なり。

(PA 065, I 388a)

(PA 064)

一六二六九

一六二七〇

一六二七一

一六二七二

一六二七三

一六二七四

一六二七五

一六二七六

一六二七七

一六二七八

一六二七九

一六二八〇

一六二八一

一六二八二

一六二八三

一六二八四

一六二八五

一六二八六

死聲を以て活主と認むること勿れ。

○比なる者は反の偶なり。反と謂えば則ち此れに有る者。彼れに有るなり。而して
比と謂えれば則ち此れに有る者。彼れに有るなり。而して
比方の比は反比の比と別なり。

○交接の義は。氣に於て交と言う。質に於て接と曰う。

○東西の行は。西するを轉と曰う。東するを連と曰う。

歳時の行は。日月に成る者を。歳と曰い。

水燥に成る者を。運と曰う。

心の營は。意作に出づる者を。爲と曰い。

感應に出づる者を。運と曰う。

○象なる者は。天に在りて見る可き者の稱なり。

質なる者は。地に在りて取る可き者の稱なり。

氣象は或いは日影を分ちて稱す。大言すれば則ち日影は共に象なり。

虛動なる者は氣と曰う。

氣質は或いは水燥を分ちて稱す。大言すれば則ち水地は共に質なり。

火は地に在りて水に對する者なり。而して

大言せば則ち日は天に在るの火なり。

然れども日火は自から專主有り。故に天日地水の偶は。古より專稱無し。

故に今

華液と稱し。

以て偶名とな爲す。

(PA 067, I 388b)